

スラバヤ日本人学校における国際交流の実践

前スラバヤ日本人学校 教諭

北海道岩内郡岩内町立岩内第二中学校 教諭 笠原雄哉

キーワード：在外教育施設、国際交流、現地理解教育

1. はじめに

縁があって赴任することになった、インドネシア共和国のスラバヤ市。日本と同じ教育を現地に住む子どもたちに施す。さらに、日本国内ではできない経験を積むことで、日本国内で生活する以上の財産を得てほしい。そんな思いで職務にあたった3年間。実際に関わった児童生徒たちとその保護者たちに十分な満足感を与えることができたかは定かではないが、私なりに取り組んだことを少し紹介させていただく。

2. 教育活動

(1) 現地における現状と要望

邦人企業に駐在する人々を中心に約700～800人の日本人が住むスラバヤ市。駐在期間が3～5年間の人が多く、その子女がスラバヤ日本人学校に通っている。また、日本人とインドネシア人の間に生まれた、いわゆるハーフの子たちも増えつつあり、その場合、幼稚部に入園し、小学部、中学部とSJS（スラバヤ日本人学校：SEKOLAH JEPANG SURABAYA）で生活する児童生徒もいる。前者の場合、「日本へ帰国した時の学習に支障がないようにしてほしい」、「受験などで不利にならないようにしてほしい」、「語学力（特に英語）くらいは高めてほしい」などの要望が多い。また、後者の場合、「日本語の教育を充実させてほしい」といった要望が多く、多種多様である。

(2) スラバヤ日本人学校について

スラバヤ日本人学校（以下：SJS）は、小学部60名弱、中学部10名弱の（平成28年2月現在）の小中併設校である。前述のとおり、駐在家庭、現地在住家庭の子女が在籍している。日本の学習指導要領で示された内容に漏れのないように取り組みながら、英会話、インドネシア語会話の授業も行っている。実際のところ多くの保護者については、「学校教育の内容をするのは当然のことで、塾のように指導してほしい」という考えが強く、国際交流や現地理解教育という部分に関しての関心は決して高くはない。

3. 実践の内容

(1) 主な取り組みの場面

①国際文化交流

日本の学校で言う「学習発表会」や「学芸会」と同じような行事である。小学部1・2年、3・4年、5・6年、中学部と4つのグループに分かれて舞台発表を行っている。毎年、日本人学校の児童生徒と交流校の児童生徒が、練習段階から一緒に、劇、演奏、踊りなどに取り組む。交流会当日までの約1か月間の練習期間で両校の児童生徒の絆は一層深まり、互いの伝統や文化を知り、体験するよい機会になっている。

②スラバヤタイム

総合的な学習の時間をSJSではスラバヤタイムと呼んでいる。中学部では、キャリア学習に取り組み、現地の邦人企業の協力の下でおこなう職場体験学習を中心に取り組んでいる。法人企業の多くは、数名の日本人スタッフが管理する形で、多くのインドネシア人の方々も働いており、体験の場面の多くではインドネシア人の方々

作業内容を教えていただきながら取り組むことになる。

例年2月には、スラバヤタイム発表会を開催し、学習の成果を報告している。保護者にも多数参観いただき、学年を超えて学習内容を共有する場になっている。

③ 旅行的行事

SJSの中学部においては、修学旅行と自然体験学習をそれぞれ、年1回交互に行っている。修学旅行では世界遺産に登録されるポロブドゥール寺院を中心とした、ジョグジャカルタ方面へ。そして、自然体験教室ではカルデラ地形の広がる、プロモ山周辺での体験学習をおこなう。教科書などでも見ることのできる歴史的建造物や自然環境を、自分の目で見ることで、見聞を広げることを目的としている。

(2) 主な実践例

ここでは、自分が中心となって取り組んだ、平成26年度中学部自然体験教室、平成27年度国際文化交流会について簡単に紹介させていただく。

① 平成26年度中学部自然体験教室での取り組み

新年度が始まってすぐ、同期の中学部教員とSJSのスタッフ2名、私の計4名で、スラバヤからバスで4時間程度の位置にある、プロモ山の下見を行った。雄大なカルデラ地形と、夜の天体観測を活動の中心にし、活動計画を立て始めた。ところが、火山活動が活発になったことから、プロモ山周辺5km圏内の立ち入りが禁止されたことから、体験教室を1か月後に控えた時期に、再度計画立案ということになってしまった。

インドネシアは熱帯の地域ということもあり、自然は豊かであるが、体験学習をできる施設や、山間部などの宿泊施設は少ない。ある時、当時の校長先生が、「バトゥ市（スラバヤから2時間程度）に、残留日本兵の方がいらっしゃるよ」と教えてくださったことを機に、バトゥ市周辺での自然体験学習と、残留日本兵の方の講話を中心とした研修旅行としての立案を急いだ。

6月におこなった、自然体験学習最終日の3日目。朝からホテルの会議室を借り切り、残留日本兵の方に講話をしていただいた。彼の名は、小野盛（おの さかり）。小野氏は、大正8年に北海道に生まれ、20歳の時に出征。23歳の時サイゴン（現：ホーチミン）、シンガポールを経てインドネシア・ジャワ島に上陸。敗戦後、彼は「インドネシア独立の約束を反故にした日本への義憤」を感じて日本軍を離脱し、オランダからの独立を目指し戦闘を続けていた、インドネシア独立軍の一員として戦闘に加わった。インドネシアの独立後も、日本へ留学するインドネシア人学生を支援する組織をつくるなど、日本とインドネシアの架け橋としての役割を果たした。なお、他の残留日本兵は高齢のために亡くなられており、彼が「最後の残留日本兵」として、現地邦人はもちろん、東ジャワ州に住むインドネシア人にも広く知られている。

生徒たちは、それぞれに「日本に帰らないと決意した時の気持ち」や「戦争についてどう考えているか」、「日本とインドネシアの今後の関係にどのようなことを望むか」などと質問し、その一つひとつに丁寧に答えて下さった。なかでも、「私は決して戦争を望んではない。戦争なんて無い方がいいに決まっている。でも、私が独立戦争に協力したことが、少しでも今のインドネシアにつながっているのなら本望だ。日本とインドネシアはこれからずっと先の時代も友好関係を保っていかなければならないし、もっともっとお互いを知るべきだ。どうかその架け橋に皆さんがなって



小野氏による講話の様子

ください」というお話がとても印象に残った。生徒たちもこの言葉には感銘を受けたようで、「将来、大学へ行って語学を学んで、インドネシアで働くために戻ってきたい」と話す生徒もいた。

この体験をもとに、平成26年度の国際文化交流会の中学部の発表では、インドネシア独立に関する朗読劇を行い、現地の中学生とともにインドネシア、日本それぞれの曲を一緒に合唱した。

なお、小野氏は直後の平成26年8月25日に94歳で亡くなり、インドネシア国軍による葬儀が行われ、英雄墓地に埋葬された。小野氏には貴重な体験の機会をくださったことに深く感謝するとともに、あらためてご冥福をお祈りしたい。

②平成27年度国際文化交流会での取り組み

例年、各グループが日本またはインドネシアの文化や芸術を題材にした発表を行う国際文化交流会。平成27年度、中学部では和太鼓の発表を行った。

和太鼓といっても全員で同じリズム、決められたリズムをたたく「揃い打ち」と、一定のリズムに合わせてそれぞれが自由にたたく「回し打ち」がある。私自身、和太鼓経験者ということもあり、生徒たちには「回し打ち」に挑戦させることにした。

和太鼓に触れるのは初めてという生徒たち。しかも全員で同じリズムをたたくのではなく、それぞれが創作したリズムをたたく。さらに、そのノウハウを現地校の生徒に教え伝えなければならない。練習開始からの1か月間。生徒たちは本当に苦労したと思う。自分たちが教えるためには、教えることをきちんと知っていなければならない。太鼓のたたき方はもちろん、その歴史なども勉強し、どのように伝えるかを考えた。結果、SJSの生徒が現地校の生徒にマンツーマンで教えることになった。もともとインドネシアの人々は「ノリ」がよくリズム感覚も素晴らしい。コツさえつかんでしまえば自由にのびのびとたたくことができる。それを見たSJS生徒は、「負けていられない」とさらに練習を積んでいった。太鼓は交流会本番1週間前まで借りることができず、それまでは、ミネラルウォーターを使用して、空になったガロンを使って練習した。

交流会当日は、SJSの生徒と現地の交流校の生徒が、息の合った打演を披露し、大成功を収めることができた。交流会後、SJSの生徒と交流校の生徒が握手する場面も見られた。生徒たちからは「こんなに達成感を感じたことはない」とか「海外という地で、しかも日本人以外の人たちと人と何かをつくりあげる、本当に充実感を得た」などの感想が聞かれた。



平成27年度国際文化交流会 中学部和太鼓

4. 終わりに

生徒たちが日本で生活していたら経験できなかった活動の数々。多くの生徒や保護者たちがスラバヤを去る時には、名残惜しそうな様子を見て取ることができる。感謝の言葉を残してくれる人も少なくない。ただ、逆に考えると、日本で生活していたら、日本の中学生が当たり前に行えるような経験をしていないということにもなる。例えば、SJSでは部活動がない。また、休みの日に友達同士で買い物に出かける、などということもなかなかできない。そのように考えたときに、いかに充実した経験をさせてあげられるか、というところが大変重要になってくる。生徒たちのこれからの人生を考えたときに、私の取り組みは、ほんの小さなことにすぎないだろう。しかしながら、日本の教育の目的である、生徒たちの「人格の形成」に少しでも役に立てたのなら幸いです。